
ゼロの使い魔～チートな転生者～

エクスタシー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの使い魔〜チートな転生者〜

【Nコード】

N7230X

【作者名】

エクスタシー

【あらすじ】

橘莫戸は死んだ。しかし神の我が儘でゼロの使い魔の世界に転生する事になった。

第一話（前書き）

どうもエクスタシーです。ゼロの使い魔第二弾書きました。第一弾とは関係ありませんが…

第一話

橘 side

気がついたら真っ白な世界にいた。俺の名前は橘莫戸^{たけりばなぐへ}。目の前にはおじいさんが立っている。

橘「あのあなたは誰ですか？」

おじいさん「申し遅れた。ワシは神じゃ。」

橘「ああ、俺の事を子供だと思っているんですね。俺は25歳です」

お「えっと、本当に神なんじゃが」

橘「はいはい。じゃああなたがゼウスで俺がヘルメスでいいですか？」

ゼ「じゃから、ワシ本当に神なんじゃ！確かにゼウスじゃが…」

橘「わかりました。じゃあ俺のプロフィール言ってみせてくださいよ」

ゼ「良かろう。えーと。橘莫戸、25歳。東京大学大学院所属。好きな物は漫画、アニメ、ゲーム、ラノベ。嫌いな物は釣り針。朝起きてから夜寝る前まで暇があれば剣道の事を思っている。スポーツ万能。こんぐらいで良いか？」

橘「本当に…神だったんだ」

ゼ「信じてもらえたところでお主の状況を教えようかの？」

橘「え？だってここに神さまがいるってことは俺は死んだんですね？だってよくあるし二次創作で」

ゼ「ま、まあ、そうなんじゃが…暇じゃから死んだものの中から選んだんじゃよ」

橘「え？じゃあやっぱり転生させてくれるんですか？」

ゼ「そうじゃよ…って目がキラキラしてるんじゃが」

橘「ああ、すみません。…俺的には禁書目録かりりなのが良いんですけど」

ゼ「すまんがそれはゼロ魔と決まっておるんじゃ。すまぬの」

橘「いえいえ。転生させてくれるなら何処でもいいですよ」

ゼ「まあそれはおいといて、じゃ。お主が好きな能力を付けるくらいは良いぞ」

橘「え？良いんですか？じゃあガチでチートにしますよ？」

ゼ「うむ。やってくれ」

橘「えーと、付ける能力は不老じゃなくて不死で王の財宝ゲイトオブパレロンが使える。あと火、水、風、土全部スクウェアで虚無と先住魔法も使えて、精霊とも仲良く会話できるようにして下さい。それと俺が知っている

アニメや漫画、ゲームにラノベの能力や技、魔法全て使えるようにするのと、魔力無限で、身体能力も超強化して下さい。それから創造魔法も付けて下さい。あとは、転生先はゲルマニアの地下資源が豊富にある土地を持っている上流階級の貴族にして。それと俺の親になった人はどんな人でも親馬鹿にしてくれ。こんぐらいあったらいいかな？」

ゼ「すごいのう」

橘「あ、やっぱり駄目ですか？じゃあ、王の財宝と不死を消して。後は……」

ゼ「いや、別に消さなくて良いのじゃが」

橘「あ、そうですか」

ゼ「なんかあったらこの携帯で電話をかけるのじゃ。あとワシが完全記憶能力と瞬間記憶能力をあげるのじゃ。ワシの我が儘に付き合っつて貰うお礼じゃ」

橘「お礼なんて……まあありがたく貰っておきます」

ゼ「と言うことで次は名前を決めて欲しいのじゃが」

橘「んじゃあ適当にカイトで」

ゼ「わかったぞい」

カイト「それと容姿はそつちで適当に決めといて。かっこよくしと

いてね」

ゼ「了解じゃ。じゃあ、この転生の扉を開けて中に入るのじゃ」

そう言って近くに扉を出す。

カ「じゃ、行って来るわ」

ゼ「ちゃんとブレイクして来るのじゃぞ〜」

そして俺は扉の中に入っていった。

第一話（後書き）

感想、指摘等はどしどし送って下さい。

第二話 家族との出会い（前書き）

更新遅れました。

第二話 家族との出会い

カイト side

気がつくと思知らぬ天井だった。転生成功したんだなーと思う間もなく誰かが入って来た。体を動かそうとするが上手く動かない。どうしたものかと思うと俺は男の人（多分父親）に抱えられた。そうか、赤ちゃんになったのか。なら赤ちゃんライフ満喫しようかな。

父「カイト、キョウ、お父ちゃんがきまちたよ。頭の固い部下を振り切って来ましたよ」

いやいや…あんた仕事しろよ。親バカにしろとはいったけどさ…。ん？そういえばいまキョウとか言わなかったかこいつ。

あ、誰かから念話だ。

キョウ《初めましてカイト兄さま。どうも、キョウです。あ、わかっていると思いますが僕は転生者なんで以後お見知りおきを。》

ん？今何だったんだこいつ。兄さま？転生者？

あ、今度はゼウスから念話が来た。

ゼ《転生成功じゃな》

カ《転生成功じゃな、じゃねえよ。キョウって誰だよ。ふざけてんのか？》

ゼ《まあ、そう怒らんでも良いではないか。いくら転生したと言っ

ても自分の秘密を誰にも言えないなんて嫌じゃないかと思ったからじゃよ》

カ《ふむ、それはまあ…良いか》

キ《そうですねよカイト兄さま。何かあったら僕に言ってください。極力力になります》

カ《ウルセエ。猫かぶるのやめろ》

キ《あ、バレた？ごめんごめん。ま、仲良くやって行こうよ》

カ《（変わり身早いな）お、おう。ところでここはなんてところ？》

ゼ《そこはトリステインじゃよ》

カ・キ《《は？》》

ゼ《じゃからトリステインじゃ》

カ《確か俺ゲルマニアに転生させてくれて言ったんだが？》

キ《僕はガリアだったはずだよ》

ゼ《ワシのミスでゲルマニアの侯爵あたりに転生させるつもりがトリステインのウィレム・ハプスブルク・フォン・ハイヤーム・ド・オラニエ侯爵に転生させてしまったのじゃ。》

カ《ええーないわー…まったく仕方がないな。まあ、ゼロ魔の世界に来れただけでもいいか…》

キ《僕も別にいいよ》

ゼ《じゃがお詫びに能力を追加しておいたぞ》

カ《へーそうか。ありがたく貰っておくよ。で、どんな能力？》

ゼ《能力というか技術じゃ。農業、工業、商業、政治その他諸々と地球の今までの技術とこれからの技術、それからありとあらゆる武器の使い方を二人の脳にぶちこんどいたからの》

キ《ありがと》

カ《ぶちこんどいたって…。まあいいや、そういえば地下資源の方は？》

ゼ《それは安心せい。金、銀、銅、ボーキサイトや石油、石炭からウランまでありとあらゆる鉱山をワシが思い付く限り入れておいたぞ。ただ入りきらずに海の方にも行ってしまったが…》

カ《ああ…それなら大丈夫だよ。多分》

キ《カイト兄さんってホントに原作ブレイクするつもりなんだ…》

ゼ《それじゃあの。またいつかじゃ》

カ《ああ、じゃあね》

キ《バイバイ》

そうして念話は切れた。

カ「（はあ〜それにしてもどうしようかな〜このジジイ…）」

リ「（ほっとけばいいんじゃない？）」

目の前には俺達の気を引こうとする親父殿がいた。

？「あ！いました！ウイレム様。仕事中ですぞ！」

ウイレム「ええい！黙れ、黙れ！後30分、いや15分だけじゃ！」

うるさいなーほんと…泣いたらあっち行ってくれっかな…。

カ「ホギヤアホギヤアホギヤア！（クソジジイ早く仕事に戻れ！）」

ウ「おーよちよち。大丈夫でちゅよ」

あれ？離れる気配がないな…。

？「あなた。その子達は私が面倒を見ますので良いから早く戻りなさい」

ウ「メアリー。愛すべき妻よ。後5分だけだ」

へー母さんはメアリーってのか。

メアリー「良いからさっさと戻りなさい。私とこの子達との三人だけの空kゲフンゲフン…さっさと戻れ！」

ウ「ひっ！わ、わかったよ…はあ」

うわっ。怖〜。俺たちじゃなきゃ失神してるぞ…。ほら、近くのメ
イドさんとかも震えてるし…。

メ「さ、カイトとキョウの相手をしまししょうかしら」

なんか慣れてるって感じだな。いつもの事なんだろうけど。あう〜。
女性の胸に触れる日があるなんて思わな……か……った。

そう思いながら俺は意識を手放した。

第二話 家族との出会い（後書き）

ノリで新たな転生者を出してしまった。後悔はしていない。

ちなみに親の名前は適当に辞書で調べた？ものです。

感想、指摘等はどしどし送って下さい。

オリキャラ紹介(前書き)

オリキャラ紹介です。

オリキャラ紹介

カイト・ハプスブルク・フォン・ハイヤーム・ド・オラニエ

容姿…とある魔術の禁書目録の碧眼ステイル

能力…不死、王の財宝、ゲートオブバビロン火、水、風、土全てスクウェア、虚無（全種類）と先住魔法が使える、精霊と仲良く会話できる、カイトが知っているアニメ、漫画、ゲーム、ラノベの能力や技、魔法が全て使える、魔力無限、身体能力最強（具体的には鋼の錬金術師のキング・ブラットレイとGOD EATERを足した感じ。助走無しで四階建ての建物を飛び越えられる）、創造魔法、この世の技術全て、これからの地球の技術（たとえば禁書目録の超音速飛行機とか）、全ての武器の使い方

設定…オラニエ家の長男。基本的に誰に対しても（キョウ、ゼウス以外）敬語だが戦闘になると一方通行化する。いつもは一方通行の反射を纏っている。主に使う武器は干将・莫弥、時々ゲイボルグ。

キョウ・ハプスブルク・フォン・ハイヤーム・ド・オラニエ

容姿…ぶつちやけステイルそのもの

能力…不死、火、水、風、土全てスクウェア、虚無（全種類）と先

住魔法が使える、精霊と仲良く会話できる、とある魔術の禁書目録の超能力と魔術、ONE PIECEの三つの覇気、魔力無限、身体能力最強（カイトと同じ）、創造魔法、この世の技術全て、これらの地球の技術（カイトと同じ）、全ての武器の使い方

設定…オラニエ家の次男。性格はGODEATERの藤木コウタ。戦闘時でも変わらない。主に戦闘で使う武器はGODEATERの新型神機（刀身 幻影大剣、銃身 フアランクス 極、装甲 アンタレス 護）。神機と超能力を使い分ける。

ウィレム・ハプスブルク・フォン・ハイヤーム・ド・オラニエ

容姿… fate / stay nightの赤髪ランサー

設定…昔カリン様の部下だった。性格は fate / zeroのライダー。火はスクウェアで土はトライアングル。後はライン。戦闘で使う武器は右手に炎を纏った投げ槍ジャベリン左手に杖。両利き。

メアリー・ハプスブルク・フォン・ハイヤーム・ド・オラニエ

容姿…金髪碧眼のマルチダ

設定…マルチダさんの遠い遠い親戚。夫には厳しいが実は優しい。
水と風はスクウエア、他はトライアングル。

オリキャラ紹介（後書き）

感想、指摘等はどしどし送って下さい。

第三話（前書き）

オリキャラの口調が今後変化していくと思います。

第三話

カイト side

どうも、カイト・ハプスブルク・フォン・ハイヤーム・ド・オラニエです。転生して早三年。今では舌足らずながらも喋ることが出来ます。歩くのは少し遅いですができます。キョウとは結構仲良くないりました。そして今日は父上に直談判しに行く日です。あ、やっと到着しました。長いんですねこの廊下。

(こんこん)

ウ「誰だ？入ってよいぞ」

カ・キ「ちちうえ、はいつでもよろしいでしゅか？」

ウ「おお！カイトとキョウか！何のようだね？」

カ「ちちうえ、しょもつこのしようきよかをくだしやい！」

ウ「可愛いお前達の頼みだ。良いだろう。だが何かあったら困るから誰かに言ってから入るんだぞ？」

カ・キ「ありがとうございますにゅ！(にこっ)」「

ウ「ぐはあ！？」

その瞬間父上の口から血が吹き出しました。まあいつもの事なのですが。俺たちはそのまま書物庫に行きます。

side out

キヨウ side

書物庫の使用許可を貰ってから1年がたった。何とか普通に喋れるようになったが書物庫で読んでない本がほとんど無くなってしまった。暇なので魔法を教えて貰うことにした。

(こんこん)

ウ「誰だ？入ってよいぞ」

カ・キ「父上？入ってもよろしいですか？」

ウ「おお！カイトとキヨウか！どうかしたか？」

キ「父上、魔法を習いたいです！」

ウ「うむ。良いだろう。ワシも早くお前らに魔法を教えたいしの」

カ「父上が教えるのですか？」

ウ「いや。メアリーが教えるのだ。ワシは仕事があるからの……」

父上が落ち込んでいる。正直どうでもいいけど。

ウ「兎に角、明日からメアリーが魔法を教えてくれるからの」

s i d e o u t

メアリー s i d e

こんにちは、メアリー・ハプスブルク・フォン・ハイヤーム・ド・オラニエです。今日はカイトとキヨウに魔法を教える日です。ああ、私と同じ水系統だったらいいわ。あ、でもその前に杖と契約をしなくてはいけないんだっただわ。そんなことを思っているとカイトとキヨウがきた。

カ「母上、お待たせしました」

メ「あんまり待って無いわよ。早く始めましょ」

s i d e o u t

カイト s i d e

メ「まずは杖との契約からよ」

そう言っつて母上との魔法の練習が始まりました。

目の前には色々な杖が有ります。ギーシュのような薔薇の杖や指輪の形の杖まである。

カ「じゃあ俺はこれにします」

そう言っつて1つの杖を取る。すると体の芯から暖かくなるような気がした。

キ「じゃあ俺はこれにしよっと」

続いてキヨウも杖を取る。キヨウも俺みたいになつたみたいだ。

メ「すごいわ二人とも。普通は数日間かけて杖と契約するのにこんなに早く契約が出来るなんて。さすが家の息子たちよ」

母上は凄く喜んでいる。

メ「さあ、魔法の練習を始めるわよ」

side out

メアリー side

今、私の目の前に凄い光景が広がっていますわ。なんとわずか五歳にも満たない息子達が1マイル程の水の壁や炎の壁を作っているの。スクウエアを圧倒的に越えているの。流石は私達の息子。

メ「次は錬金よ」

そう言つて私は石を鉄に替える。

メ「さあ、やってみなさい」

私がそう言つと息子達は目の前の石を金に替える。調べると不純物がほとんど混ざっていなかった。兎に角驚きっぱなしだったわ。ア

ノ人が帰ってきたらこの事を言わなくちや。

第三話（後書き）

感想、指摘などはどしどし送ってください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7230x/>

ゼロの使い魔～チートな転生者～

2011年11月3日01時57分発行